



少女Cの 学生時代

古賀 ちひろ

少女Cはヲタクになったことで世界を広げた

『「何かに熱中・没頭すること」がヲタクの定義なら私もヲタクです。私を〇〇ヲタクと表現するなら、韓国ヲタクと文章ヲタクです』

私の目の前に座る少女Cは至って普通のトーンで私にそう語った。

前者はともかく後者の文章ヲタクとはいったいどういうものなのか、と頭上にはてなを浮かべる方も少なくないと思うが、順を追って説明してくれるらしいので、しばらくお待ち頂きたい。そして、このページを書くにあたって、語尾が「です」「ます」調の敬語で執筆していないことをお許し頂きたい。「です」「ます」調で書かない理由は、ここで登場し、少女Cにインタビューしている「私」が今、まさにこのページを開いて読んでいる「あなた」であるという設定だからだ。何故そんな設定を？と思うかもしれないが、それは後程、少女Cが文章ヲタクを説明する際に説明してくれるだろう。

まず、何故韓国ヲタクなのか聞いてみることにした。

『私と韓国との出会いは大学2年の時、友人に引っ張られて行った韓国旅行です』

少女Cは元々アメリカに7年半住んでいたこともあり、世界に対する意識が強かったのと好奇心が強かったことから、分野に捉われず広く学べるC大学の総合政策学部、国際政策文化学科に2010年春に入学した。しかし、最初の2年間はピンとくる分野がいまいち無かったと、少し残念そうに少女Cは言う。残念そうにと言っても自分が期待していたものが無くて残念と言うよりは、もう少しアンテナを張り、周りの関心ごとに興味を示せなかった自分に後悔しているようなニュアンスが彼女の表情から見てとれた。環境問題のゼミに在籍するも、環境問題を取り扱う授業が大学に少なかったため、勉強するにあたり限界があったらしい。そしてなんとなく流れで、大学2年の9月、同学部の友人4人と共に2泊3日の弾丸韓国旅行に行った。ただ、その時は全く韓国に興味が無く、「化粧品が安い」のと「文字が記号みたい」という印象しか持ち合わせてなかった。2泊3日という短期間であったせいか、特に文化に触れることもできず、あっという間に旅行は終わってしまった、と彼女は語る。

え？旅行を通して韓国に興味を持たなかったなら、何を通して興味を持ったんですか？と質問したら、彼女は目を輝かせて「きっかけは少女時代です」、と言い切った。

「大学2年生の時、学部内で有志を募り、私がリーダーとなって文化祭で少女時代のコピーダンスを踊ったんです。元々、フィーリングで好きと思った曲をウォークマンに入れており、彼女た

ちの曲も、単純にこの曲好きだなと思ったものをウォークマンにいれました。一人の時に鼻歌を歌ったりすることが好きなんです、彼女達の歌詞はすべて韓国語のため、口ずさみたくても口ずさめません。私も歌いたい、という些細な思いから韓国語に興味を示しました」

歌詞を調べて旅行以来にハングルを再び目にしたが、もちろんハングルは読めないためカタカナの振り仮名を読んだ。しかし、ビジネスレベルの英語が操れる彼女の耳からすると、自分の発した日本語のカタカナの発音とイアホンから聞こえる彼女たちの発音は少し違っただけ。そのズレに違和感を感じ、ハングルを読めるようになったらそのズレが解消されるのかと思い、気づいたらネットでハングル早見表を検索していたと言う。完璧主義者な一面があるのだろうか。

ハングル早見表を検索したのが、大学2年の春休み中。大学3年に進学し、彼女は1年生に混じって韓国語の初級クラスを履修したと言う。読めればいいのでは無かったのか？と聞くと、彼女は少し言いづらそうに話し始めた。

「読めるようになったら今度は書いてみたくなかったです。韓国語で短文が書けたときの感動は今でも忘れられません。あと・・・SHINee（シャイニー）という韓国のアイドル5人組にハマったんです。某動画サイトにあげられる彼らの出演番組を見たりしたんですが、彼らが何て言っているか視覚的にではなく、聴覚的に分かりたくなかったです」

要するに、アイドルに影響されてなのか。絡まっていた糸がようやく解けたような気がして、少女Cの話に相槌を打つと彼女は訂正するかのよう慌てて付け足した。

「動機はアイドルですが、勉強を本格的に始めるにあたって、韓国語の魅力に憑りつかれ純粋に韓国語で話せるようになりたい、検定を取りたいという明確な目標が生まれたのと同時に、葛藤にも直面しました」

韓国語も日本語も、中国語の影響が強く、3か国語とも似ている。特に、韓国語と日本語は文法的にも似ており、韓国には漢字語というものが存在する。例えば日本で言う「約束」は韓国語で発音すると「ヤクソク」となる。共通点が多く、学ぶ度にその共通点が次々と現れていくのが楽しかったと彼女は話す。また、大学にいる韓国人の留学生と、単純な文ではあったものの、英語と日本語以外の言語でコミュニケーションをとれた感動が大きく、彼らと韓国語で日常会話がしたいという思いが強くなったと言う。

葛藤に直面って、どういうことですか？

「韓国語を通して韓国に興味を持ち始めましたが、韓国との歴史問題、領土問題が立ちばかりました。両国が持っている意識が正しい正しくないにしろ、自分が無知であることにまず気づか

されました」

ただ韓国語を勉強し話せるだけでいいのか、その国について無知のまま、その国の言語を話すことは恥ずかしいのではないかと考えたと言う。そこで、韓国語の勉強だけでなく、韓国についても勉強を始め、大学3年の夏季休暇中に韓国の大学へ短期留学をしたと。

「一回目の韓国と二回目の韓国は別世界でした。言語を知るだけでここまで世界は変わるのか、と身を以て実感しました」

その時の感動を思い出し、懐かしむように浸っているのが彼女の目から見てとれる。以降、勉強を続け、まだまだレベルは低いですが半年でハングル検定4級を取得し、大学4年に進級した今も勉強を続けているという。

「今は辞書を使って、韓国のウェブに上がった記事を翻訳したり、ドラマを見て聴覚を鍛えたり、基礎的な勉強ではなく応用的な勉強をしています。社会人になっても韓国語の勉強は続けたいと考えています」

希望に満ち溢れた目で彼女はそう締めくくった。

引き続き、私は次の質問に移った。

文章ヲタクって具体的にどういうヲタク？

「文章ヲタクと言いましたが、正確には何事も文章で表現するヲタクです。文章を使って表現をすることが好きで、いつかドラマのシナリオライターになることが夢です」

大学に入ってからツイッターを始め、ツイッターで物語書いたら楽しいのではないかと、別のアカウントを作り物語を配信してきたとのこと。フォロワー数も1000人を越えているらしい。物語を書くのとは別に、最近ハマっているのは四次元妄想らしく、具体的にどういう妄想なのか聞いてみたところ一つ書いてくれた。以下の文である。

『僕は悪い男だ。弱い君を攫って簡単に途中で手放してしまった。永遠にどこまでも行けたらいいのに。ごめんね。でも、攫ってしまった一瞬だけど、僕の心は弾んで、幸せだった。来年もまた君の面影を探して僕はまた、誰かを攫って捨てるのだろう。』

「タイトルは『風から桜への懺悔』です。強風により近所の桜が散りきってしまったのを見て書きました。風にも桜にも精神はありません。しかしそういうものに精神が仮に宿ってたらどんなことを思うのだろうと妄想するのが私が勝手に呼んでいる四次元妄想で、それらの妄想を文に起

こすことが好きなんです。物語を書くにしろ、専門的な書き方などは学んでいませんが、これからもどんな文章であれ書き続けたいと考えています。」

つまり、文章を書くことが好きで、「学生時代にやってきたこと」を表現するこの場も、彼女にとっては物語を表現する一種の原稿用紙だったということだ。やっと全てが解決された気がした。

手元に置いてあった水の入ったグラスを一口流し込む。少女Cの学生時代とは何だったのか、頭で整理してみる。どうしてもヲタク要素が強すぎるが、きっと少女Cにとっての学生時代を一言で表すなら「世界の広がり」だろう。一見、韓国に触れて韓国だけを見ているかのように見えるが、それは視野が狭くなったのではなく、あらゆることを知り視界が開けたのではないかと、私は解釈する。また、文章を書くにしろ・・・四次元妄想をするにしろ、「相手」の立場に立つことで、自分では知らなかったことに気づくことが出来たのでは無いだろうか。ヲタクになることで、視界が広がるのかは人それぞれかもしれないが、少女Cに関しては、とても短時間なインタビューではあったが、少なからず私はそう思った。